

中ソはアジアの基軸をめざす！

中ソ発展のダイナミズム——これは社会主義延命につながる。
だが近代の政治意識に目覚めた人民蜂起は大きく日中関係を変質させる

中 嶋 嶺 雄

(東京外国語大学教授)

五月十五日から四日間に行われてきた中・ソ首脳会談は、両国の三十年に及ぶ対立を終結させる、まさに歴史的な和解であった。

そしてベレストロイカの旗手、ゴルバチョフ書記長の訪中に刺激され、百万規模のデモにまで膨れ上がった中国学生民主化要求の波。

社会主義体制を根幹から揺るがすこれらの動きに対し、日本はいつまでも傍観者的立場を続けてはいられない。

国際的なデタントの潮流の中で、中ソ和解は世界に何をもちたらすのか——中嶋嶺雄教授に伺った。

正常化のダイナミズム

——まずは今回の会談の印象からお伺いします。

中嶋 今回の中・ソ首脳会談は、まさに「世紀のサミット」と言われるにふさわしい歴史的な会談であったと思います。しかもゴルバチョフ書記長訪中の際、北京市内では民主化を要求する学生デモの渦が巻き起こっており、「ベレストロイカの旗手」を迎える学生たちの波

に押されて、書記長自身、天安門広場に一步も足を踏み入れることができなかった。まさに北京を舞台として、中・ソ首脳会談と民主化要求デモという二つのドラマが同時進行していったわけで、そのドラマ性も含めて、歴史に残る会談であったという気がするんです。

会談そのものは、やはり国際情勢が、特に昨年後半以来の米・ソ関係の歴史的な和解、緊張緩和という世界情勢の大きな変化、そして今回の中・ソの和解という、これまた現代史を三〇年間にわたっ

います。

て彩ってきた、対立抗争の歴史にビリオドが打たれたというところで、これが長期的にもたらす影響は、非常に大きいと思

役者は、片や世界のスターであるゴルバチョフ氏、そして片や中国の最高実力者鄧小平氏。特に鄧氏は、この

三〇年間の中・ソ論争から対立、対立から抗争へ、そして和解へと、まさに現代史のドラマチックな一章の当事者でもあり生き証人でもあったわけですから、今回のサミットを、さぞかし感慨深く迎えたことと思います。

私はこの会談の模様を、NHKの衛星放送で解説していましたが、ゴルバチョフ氏のようなスターも、鄧小平氏の前では何となく小さく見えたのが現実でした。中・ソ論争から今日に至る三〇年間、私自身もこの問題を研究してきただけに今回の会談には印象深いものがありました。

——中・ソ首脳会談を無事終

えたことによって、今後、両国の関係はどのように展開して行くのでしょうか。

中嶋 すでに、鄧小平氏からは、三年前にルーマニアのチャウセスク氏を通じて、中・ソ和解のための三条件が提起してありました。その親書を託したところ、ゴルバチョフ氏のほうは、そのメッセージどおりに、毎年一つずつその障害を克服していった。そして、その障害の一つであったモンゴルからのソ連軍・四万数千名のうち三分の二が、中・ソ首脳会談の行われた五月一日を期して撤兵を開始したということも、いかにこの会談の国際情勢に及ぼす影響が大きいかを象徴しているかと思えます。

また同時に、国家と国家の関係だけでなく、党と党との関係も完全に修復されました。その象徴として、中・ソ両国共産党の機関紙「人民日報」と「プラウダ」の記者交換も実現することとなり、ここにいわば中・ソ関係は完全に正常化されたと言えるでしょう。

中・ソ関係が正常化されてくると、い



開かれた体制をつくる

わば社会主義としての中・ソの相互依存関係が、今後更に強化されると思えます。それは社会主義の発展途上国である中国と、社会主義の先進国であるソ連との間で相互補完関係が非常に強いということもありますし、経済改革が先行した中国と、政治改革が先行したソ連との間には、互いに学習しあう要素が非常に強いという理由もあります。このどちらが欠けても、社会主義は地に墜ちるということをお互いに学んでいたわけです。そういう状況の中で、いま社会主義は、今の中国の激動が示しているように、内部から崩れようとしている。これをなんとか防ぐためには、社会主義の改革を進めるといふ、大きな潮流には逆らえないと思います。

そういう意味で、中・ソ双方の相互依存、相互補完関係を強化し、社会主義を活性化させる、つまり延命させるためには、もう内輪げんかなんかやっていたらいい、ということだと思います。このことの意味は非常に大きいわけで、今後中

・ソ両国は、経済交流や、科学技術交流や、貿易の拡大、人的交流等々で、かなりダイナミックに発展していくのではないかと思います。

アジアに安全保障システムをつくる

——ところで、中・ソ両国が歩み寄りをもせた要因の一つとして、双方の経済改革の行き詰まりという点が挙げられると思うのですが、今回の和解によってもたらされる経済的なメリットはどんなところにあるのでしょうか。

中嶋 今の中国は、経済改革の歪みとして、内陸の開発が遅れていますから、この中・ソ首脳会談のコミニケにもあったように、新しいシルクロードの建設、中・ソ最短距離の鉄道を中心とする、中国の内陸開発、これは「大西方計画」と言っていますけれども、これが非常に進むことになりそうですし、また、このような関係を中心に、中国のありあまる労働力をソ連のシベリア、あるいはソ連

極東部に投入するというような計画もすすみつつあります。

紙バルブ合弁企業などにも、ソ連の技術協力、投資、借金が与えられるというような新しい計画が進んでいます。さらには、内蒙古の包頭製鉄所へのソ連の借款の供与が、もう行われていることに見られるように、互いに外貨を欠く社会主義国としては、相互に協力しあうたら、大きく外貨を節約できるし、相互に補完できる。ソ連で最も不足している労働力を維持し、中国で不足している技術を導入することができるという点で、かなりダイナミックに発展すると思います。

中・ソ貿易も、現状は三〇億米ドル前後ですが、一〇年後には百数十億米ドルぐらいいまでなると予想されます。この数字は、ほぼ日中貿易に匹敵しますから、貿易依存度の低い社会主義国としてはかなりの量になるわけです。

——中・ソの和解が周辺のアジア地域に与える影響についてはどのようにお考えですか。

中嶋 中・ソが和解することによって、中国とモンゴルの関係も良くなるし、朝鮮半島でも、非常に硬直した閉鎖的な体制である北朝鮮が、やがて社会主義の「改革」のほうに動いていくでしょう。それからカンボジア問題も、民族自決という原則で解決したいということとは、大局的には、やはり今の現状を認めるといふことですからね。そうすると中越関係も改善されるという形で、社会主義の緩やかな同盟、これを中・ソ双方は「連帯」というふうに言っていましたけれど、そういう傾向が進むのではないかと思います。

それからもう一つ。今回の訪中において、ゴルバチョフ書記長は北京演説を行い、国境のソ連兵力一二万人の削減と、一六隻の極東艦隊を減らすという、具体的な提案を示しています。これは社会主義が、軍事力を強化してアメリカと張り合う道を捨てたということ、アジアの安全保障、あるいはアメリカの政策にとっても、非常に影響が大きい。

ゴルバチョフ氏は、特にアジアには安全保障のシステムがない、と言っています。ヨーロッパには全欧安保というのがありますが、その全欧安保を成功させた時と同じようなことを、アジアにあてはめようとしています。従来西側諸国は、これをソ連の平和攻勢であるとか、ソ連の策略であるという形で警戒していましたが、ここまで具体的に問題が提起されると、そうとばかりは言っていられないと思います。ゴルバチョフ書記長が今回の演説で、アジアには集団安全保障を講ずるような、協議と交渉のシステムが欠如していたということを認識して、ソ連が新たに問題を投げたということは、長期的に見て、非常に大きな意味を持つのではないのでしょうか。

——今後、日本はどういった対応を迫られるのでしょうか。

中嶋 日本は今まで中・ソ対立を前提とした外交防衛政策を立ててきました。ところが、アメリカや中国と共に、ソ連の脅威に対抗するという前提が、中・ソ

の和解によって崩されざるを得なくなりました。その意味ではジレンマも大きいと思います。なぜなら、西側諸国の中でも特に日本は、中・ソ和解の可能性を強く否定してきましたから。中・ソ首脳会談をやってもたいした意味はない、というふうに、できるだけその意味を過小評価しようとしてきたのですが、今日の日本の外交姿勢が根本的に問われることになりつつあると思います。特に、ゴルバチョフとさして会えないのは日本だけなんです。そんな状況の中で日・ソ関係を正していこうとするのですから、日本はいよいよ真剣な対応を迫られていくでしょう。それから、日・中友好関係ということも、日本外交の大きな柱として挙げられます。日・中友好とは何なのか。中国国内で民衆から指弾されている李鵬氏や鄧小平氏と連帯することが友好である、などと考えていると、これは大間違いです。やはり多くの中国の学生や、知識人や、民衆が、何を求めているかということ、を、きちんと受け止めない限り、日本

は中国民衆との間でもギクシャクするでしょう。中国は首脳部と大衆が求めているものの中に、大きなギャップがあるような気がします。

人治から法治 国家へ

——その「大衆が求めているもの」という点について、すこしお話を伺いたいと思います。

胡耀邦氏の死をきっかけとして発生した、学生による民主化要求デモは、彼らが「民主化の旗手」と仰ぐゴルバチョフ書記長の訪中によって、より一層の高揚を見せる結果となりました。このデモの背景となったものは何なのでしょう。

中嶋 直接的には胡耀邦氏の死を、李鵬氏をはじめとする政府当局が非常に冷淡くあしらったということです。告別式においても、胡耀邦氏を過去の人として扱って、彼が晩年、今から二年半前に起こった民主化に賛同したがゆえに失墜していったことについては、一切触れな

った。これが学生たちを胡耀邦氏の死に対する同情を含めて、あそこまで大きなデモに立ち上らせたきっかけとなったわけです。しかしその背景としては、経済改革や開放政策をやっても経済が混乱し、混乱した中で、一部の者だけが利益を得ているという現状があるのです。そして共産党の幹部が甘い汁を吸って、特権を行使している。もうたまらない、という気持ちがあったと思います。そこへもってきて、この三月下旬から四月上旬の全国人民代表大会では、強硬な引き締めを決定しているわけです。これをやっているのが李鵬氏です。そうすると、もともと学生たちがずっと求めてきた民主化という課題は、ますます遠のくという

らだちが、ここまで運動を大きくもり上げたのだと思います。学生たちのスローガンをみると、民主化といっても、ゴルバチョフのソ連に比べていかに遅れているかということがわかります。政治改革の要求にしても、「台湾の蔣経国総統の晩年に学べ」というよ

人民の波の威力

——ところで、今後の党内情勢の動きなんです。訪米中の万里氏——この人は趙紫陽氏に最も近いと言われる人物ですが、この万里氏が近々帰国します。そして、全人代（全国人民代表大会）委員長という権限から全人代常務委員会を開き、李鵬氏の戒厳令発動の際の不手際を糾弾することで、李鵬氏を解任に追い込むということも考えられると思うのですが……。

中嶋 民主化要求が勝利すれば、李鵬氏の解任は当然考えられます。戒厳令にしても、憲法に基づいてやっているのではなく、いわば党の中央上層部においては勝手にやっているわけですから、法的な根拠はありません。趙紫陽氏の解任も、中央委員会を開いて決定したのではなく、政治局の中で、拡大会議方式という中国共産党がよくとる方式で強引に決定しているわけですから。そういうこと自

うな声が出てきているくらいですから。ただ、民主化要求の声は、社会主義の根本を揺るがすものであることには違いありません。選挙の自由がない。自分たちが代表を選べない。公有性より私有性のほうがいい……。

これを具体的に言えば、学生たちは憲法による政治、あるいは党規約に基づいた政治をやってくれと要求しているんです。憲法に基づけば、鄧小平氏はなにも中国を代表する人じゃないんです。国家主席でもなければ、国民の首相でもなければ、党の総書記でもない。その人がすべてを牛耳っている体制そのものに疑問を感じているんでしょう。ところが鄧小平氏の意向のもとで、そういうことに異議を申し立てた学生たちを、李鵬氏あたりは、「動乱だ」と決めつけているわけですから、これに学生たちが反発するのは当然のことですね。その意味では、初めて今回の民主化要求デモで、中国の学生、知識人の間から、いわば「人治」ではなく、「法治」というものが要求され、

体がいま言った「法治」政治に反することになるんです。学生たちはそこを突き始めています。李鵬氏の戒厳令発動の正統性も失われ、また、発動しても軍が動かなかったという決定的な状況の中で、いま李鵬氏たちは非常に追い詰められています。従って、李鵬解任ということになれば、当然鄧小平氏は引退、それも人民に背中から石を投げつけられるような不名誉な引退ということになるでしょう。まさに世紀の会談で、ゴルバチョフ書記長さえも圧倒した鄧小平氏が、その肝心の中国の膝元で崩されようとしているのです。毛沢東の政治を脱却してここまできたにもかかわらず、彼が権力にしがみついてすべてを牛耳ろうとしたことのツケが、一挙に回ってきたという感じですね。

——その李鵬首相解任ということは今近いうちにありえるのでしょうか。

中嶋 場合によってはすぐにでも考えられるという状況にまで、きのう今日あたりはなっています。しかし、鄧小平氏

さらに、きのうから今日の状況を見てみると、「護憲」ということを言っているんです。日本では「護憲」などと言うと、手垢のついたスローガンになっていきますが、中国でこういう言葉が出てきたというのは初めてのことで、まさに画期的なことと言えるのではないでしょう。か。ところで、仮に今後、趙紫陽氏が復権して、いわば改革派による政治が行われたとしても、共産党の一元独裁そのものを手直しする、少なくとも最低限度としては党規約に基づいた政治をする、憲法に基づいた政治をするということがない限り、学生たちには、もう共産党の一元独裁そのものがこういう体制を維持しているんだという、根本的な批判がありますから、この批判の波はおさまらないでしょう。

つまり中華人民共和国は、共産党一元独裁が根本から崩れようという、そういう危機に瀕しています。それも単なる政治危機ではなく、体制的な危機だという気がします。

や保守派が強硬に巻き返せば、当面は無理でしょう。学生たちも疲労していますし、軍をバックに戒厳令をしいた状況を転換させることは容易ではない。運動は一時的に抑えつけられるかもしれない。ただ、李鵬解任云々はそれほど大きな問題ではないんです。今回の民主化運動というものは、そういう党内の路線闘争、権力闘争に結び付いて、その手段として行われたものではないということに大きな意味があり、そうでなければこのように大規模なものにはならなかったと思います。

つまり派閥争いではなく、もっと根本的な体制自身がここまで大きくなったため、逆に趙紫陽氏も学生に歩み寄っている。彼にだって責任はあります。胡耀邦失墜のときは、自分は鄧小平氏と一緒にあって、胡氏を追い落とし、そして経済を混乱させた。そういうことにも学生は飽き飽きしているわけです。学生たちには、もう趙紫陽が希望の星ではないんです。当面は李鵬、鄧小平を引退させなければならぬけれども、それなら趙紫陽

が希望の星か、万里が希望の星かという、必ずしもそうでないところに一種のジレンマがある。だから趙紫陽のような改革派が主導権をとった場合には、今の民主化要求を受け入れなければならぬ。それには根本的には中国共産党の一元独裁が崩れるというところまでいかざるを得ないのではないだろうか。

「動」と同じような、歴史的意味がある。特に知識人が非常に大きな役割を果たして、常に皇帝型権力を許してきた中国の政治文化、つまり権威主義体制に対抗する、近代政治意識の覚醒という意味でも、一種の知識革命的な性格を伴っている。それが今回のデモの大きな特徴ではないだろうか。

——それでは、学生たちは確固たる指導者なしに、今のデモを行っているという事ですね。
中嶋 そう、そこに今回の学生デモの大きな特徴があり、また歴史的意義があると思います。一部の勢力がやっている和李鵬氏は言っているけれども、そうではなく、非常に大衆的な基盤のある一種の市民革命、そして一種の、いわば学生自身を中心とする素人の民衆がいよいよ立ち上がったという、まさに「人民の波」だと思っています。

——そういった意味で今回の学生デモというものは……。
中嶋 歴史的な意味があると思います。かつて七〇年前に行われた「五四運

動」やつばり、新しい中国を生んでいくと思います。先程も言いましたように、今の中国に対する学生の絶望感が、学生たち自身を動かしましたから。ですから我々の周辺の留学生も立ち上がっています。日本でも、この二二日に二〇〇〇名のデモが六本木で行われていますが、このまま世界に全中国の輪が広がるということになると、いい加減な形で收拾をするという訳にはいきません。目的が貫徹されるまで、仮に武力によって弾圧されても、それは次の大きな爆発を促すでしょうから、党中央としても真剣な対応を迫られざるを得ません。当面、戒

厳令を施行した李鵬氏、あるいはもう引退すべき鄧小平氏の責任も大きいし、彼らが引退した後に、いまの改革派、趙紫陽氏あたりが、もし主導権を握ることが出来るならば、全面的に学生の対話を受け入れて、中国の政治を開かれた体制にしていけないと、大変なことになると思います。そこで学生たちには突き詰めた思いがあり、だからこそ、跳ね上がった行動に出ないんです。非常に戦術的で、しかも挑発に乗らないように——そこに今回の学生デモの大きな特色があると思います。まさに歴史のうねりを見るような思いがしますけどね……。

このステートメントは、本当の日中友好のためには言うべきで、それは内政干渉でも何でもありません。そういう問題を放置しておきながら、中国の改革がうまくいっているとか、日中関係は友好で問題ないような形で、中国への投資を奨励してきた日本の対中関係のあり方が、根本的に問われるのではないのでしょうか。一種の偽善の上になり立っている日中関係、おえらがただけの交流の日中関係を、根幹から変えていくべきだと思えます。

ですから、日本は経済だけ成功していただけますけれど、例えばあいつた中国の学生たちが本当に目覚めつつある場合は、あたたかく見守ると、そういう柔軟な姿勢が必要なのではないかと思えます。

——その意味でも今回の中ソ和解あるいは中国の学生デモというものは……。

中嶋 大きな歴史的教訓だと思えます。ですから、中国とソ連が、この問題をどういうふうにするか、この問題として吸収していかうか、というよりは吸収していかざるを得ない問題ですから、西側はそれに対してどういう関係を築いていくかということなんです。社会主義も、一方では崩壊の危機に瀕しているもの、まだ当分は存続していくでしょうから。日本としても、今後ソ連脅威論とか、見せかけの日中関係だとか、あるいは中国の言うことに対していつも頭を下げていて、私の言う「対中国位負け外交」、そういうものから脱却しない限り、本当の意味での日ソ友好、あるいは日中友好というものは、あり得ないのではないかと思えます。

中国の現状に関しては、アメリカのブッシュ大統領が、学生の民主化を支援する、と発表しましたね。それに対して日本は何も言っていない。むしろ、学生運動などは大したことではないと、そういう形で発言してきました。それは、中国の内政に干渉しない、と言えばその通りなんです。しかしながら流血の惨事を受けよう、軍の発動による学生の鎮圧ということは絶対に避けてほしいくら

また、日本は同時に、今まで非常に立ち遅れていたソ連との関係改善に、本気で取り組まなければならぬでしょう。北方領土の問題があります。北方領土問題を解決しようと思うなら、ゴルバチョフ書記長の来日を実現するような環境をつくる努力をしなければいけない。今までゴルバチョフ書記長が来日しようとする、非常にナショナルスティックな対応をして、来日が不可能な状況を作った責任が日本にもありますから、その辺を考え直さなければいけません。